令和六年度卒業式　式　　辞

　春の訪れを感じる今日の佳き日に、このように厳かに令和六年度滋賀大学卒業証書・学位記並びに大学院学位記授与式を挙行できますことは、滋賀大学にとって、この上ない喜びであります。経済学部四百二十三名 、データサイエンス学部九十二名の卒業生の皆さん、および経済学研究科博士前期課程二十一名、並びにデータサイエンス研究科博士前期課程四十一名、博士後期課程三名の修了生の皆さん、本日は誠におめでとうございます。またそれぞれの学生を支えてこられた保護者やご家族、ご友人、関係の方々に対しまして、その力強いご支援とご助力に敬意を表しますと共に、厚く御礼申し上げます。
皆さんの学生生活を振り返りながら世界で起きた出来事と、皆さんがこれから挑戦する未来について三つのことをお話したいと思います。まずはコロナ禍の影響です。次は世界の不安定化です。最後に技術進歩による社会の変化についてです。
　五年前の一月、学部を卒業する皆さんの多くが高校生だった時に、新型コロナウイルス感染症が突如として広がりはじめました。それから三年間は、社会全体でさまざまな活動が制限され、不自由な生活を強いられました。新たな変異株が現れる度に感染が再拡大し、緊急事態宣言が繰り返されました。その様子は、ハンマー・アンド・ダンスとよばれました。ハンマーは感染症をたたく対策の強化、ダンスは制限の緩和を意味します。変異株が現れるごとに感染力は強くなったものの、幸い重症化率は下がりました。そして二年前の春からはコロナウイルス感染症は「五類感染症」となり、すべての制限は解除されました。この二年間は皆さんも通常の学生生活を送ることができたと思います。そして、本日このように卒業式を挙行することができ、皆さんの人生の一つの区切りとなる機会をお祝いできることは、生涯の思い出になることと思います。コロナ禍は社会にとって大きな試練でした。感染症対策と社会経済活動の維持という二つの相反する目的のバランスをどのようにとるかについて、単純な答えはなく、各国の対策もさまざまでした。コロナ禍への対策の評価はまだまだ不十分だと思います。将来の新たな感染症を見据え、さまざまな観点からのコロナ禍の評価と総括が求められます。
　コロナ禍は試練でしたが、残念なことばかりではありません。禍を転じて福となすという言葉がありますが、皆さんはコロナ禍という困難を乗り越えて大きく成長してきました。この経験を、他の世代にはない皆さんの強みにしていただきたいと思います。また、コロナ禍によってデジタルトランスフォーメーションが一気に加速しました。コロナ禍が収束した現在でも、大学ではオンライン授業を活用し、企業等ではオンライン会議を活用しています。現在では対面とオンラインのそれぞれの長所を活かして効率化が進んでいます。
　次の大きな出来事は、世界の不安定化です。ロシアによるウクライナ侵攻が始まったのは二〇二二年二月二十四日ですが、すでに三年をこえて長期化しています。大国の人的犠牲をいとわない攻撃の前に、小国が自身の領土と独立を守るために戦っています。また二〇二三年十月七日にはイスラエルとハマスの間の戦争が始まりました。この戦争も一年半近くとなり先行きが見通せません。どちらの戦争でも、町が破壊され、犠牲者が増え続けています。戦争が長引き犠牲者が増えるごとに、憎しみの連鎖が続いていきます。第二次世界大戦後、さまざまな紛争があったものの、世界が発展し、だんだんと平和になっていくものと思っていたものが、これらの戦争の勃発によって平和への希望が打ち砕かれたように感じます。第二次世界大戦以前の百年前の世界に戻ってしまったかのような感じさえあります。昨年秋のアメリカの大統領選挙でも「力による平和」という言葉が使われました。ロシアによるウクライナ侵攻もイスラエルとハマスの戦争も、当面は力による平和という形で一定の収束を見せるかも知れません

が、それは永続的な平和にはつながらないと思います。それが第二次世界大戦で人類が学んだことではなかったでしょうか。

このように世界は不安定になっていますが、幸い平和な日本に住む私達は、この平和を積極的に守っていくことが重要です。いま日本には外国から多くの旅行者が来ていますが、その一つの理由は、日本が平和で安全だからだと思います。平和や安全に価値があるわけです。平和や安全は、当たり前のもの、あるいはただで手に入るものではなく、積極的に守る価値のあるものです。平和で安全な国が発展することによって世界の平和に貢献する。そのことが我々に求められていると思います。

永続的な平和のためには、人種や文化が異なっても相手の存在を認め、暴力に訴えず話し合いで解決していくことが必要です。これは一言でいえば「多様性を尊重する」ということになると思います。多様性の尊重は社会のさまざまな場面で強調されてきたのですが、最近では、戦争の影もあり、特定の集団の正当性のみを主張する傾向が強くなっています。特定の立場のみを正しいとする主張は、単純でわかりやすいという面があります。しかし実際には世界は多様で複雑です。滋賀大学で学んだ皆さんは様々な観点から社会を眺める素養を身に着けたものと思います。日本は平和で安全で、ともすると外国の紛争なども報道で見るだけの遠くのものと感じてしまうこともあります。しかしながら、世界が不安定化する中で、日本は日本だけで存在することはできません。日本の経済は世界との貿易で支えられています。日本の食料自給率は四割程度ですし、エネルギー自給率は十数パーセントしかありません。日本はその強みを活かしつつ、世界の中でルールを守り競争していかなければなりません。滋賀大学は「湖国から世界へ」というキャッチフレーズを使っていますが、皆さんがこの滋賀大学を巣立ち、世界を相手に活躍していただくことを期待しています。

最後に、技術進歩による社会の変化について述べたいと思います。ここ数年のデジタル技術の発展は目を見張るものがあります。特に二〇二二年十一月に登場した ChatGPT は大きな驚きを持って迎えられましたが、その後の発展も著しく、今では大学入試問題も解けるようになってきました。今後も多数の生成ＡＩモデルが登場し、利用環境も整備され、我々の仕事のやり方や日常生活にも大きな影響を与えると予想されます。教育も大きく変わっていくことでしょう。そのような中で重要なのは生涯教育です。現在は寿命も延び、人生百年時代と言われています。滋賀大学で皆さんが学んだ知識や学力は、皆さんの基礎となるものですが、ＡＩの進化に負けないように学び続ける姿勢を持ってください。急速な技術進歩の中で、最近ではリスキリングという言葉で、社会人の学びなおしの重要性が強調されています。滋賀大学では、社会人のリスキリングの機会も提供していきます。ぜひ、時々は滋賀大学に戻り、生涯学びなおす機会を作っていただきたいと思います。また大学生活で得た友人とのつながりを生涯大事にしていただきたいと思います。

経済学部及び研究科の卒業生、修了生の皆さん。日本は長い間生産性が向上せず、失われた三十年と言われています。皆さんには日本の経済を力強く再生する役割が期待されています。日本がまだ途上国で、追いつけ追い越せの時代だった頃は、日本人は海外から学び改善する点で大変優れた能力を発揮しました。しかし世界の最先端に追いついたあとの創造性という面では、日本はまだまだであると思います。日本の優れた伝統を武器に、皆さんには日本に新たな発展をもたらしていただきたいと願っています。

データサイエンス学部及び研究科の卒業生、修了生の皆さん。Society5.0 の時代に入ったこの社会を牽引するのは他ならぬデータサイエンスです。滋賀大学データサイエンス学部および大学院で皆さんが受けた教育は、日本をリードする先端的なものであったと思います。自信を持って今後の仕事に取り組んでください。企業からの派遣で

修士課程を修了された皆さんは、ご自身の企業に戻って、現場でデータサイエンスを駆使していただけることでしょう。

新しい時代の最前線に立つ皆さん、本日は本当におめでとうございます。滋賀大学を卒業した諸先輩は、社会のあらゆる場面で活躍しています。今日卒業する皆さんの活躍の場は大きく広がっています。あらためて皆さんの新しい門出を祝福いたします。

令和七年三月二十六日

国立大学法人滋賀大学長　　竹村 彰通